

平成 22 年度 卒業論文
日本一の幸せ者を探せ

所属ゼミ 村澤ゼミ
学籍番号 1060401039
氏 名 片山 裕善

大阪府立大学経済学部

要約

ヒトが持ち得た「幸せ」というものは、あくまでも個人の内から湧き出る主観的な感情であり、それゆえにヒトの幸せは、客観的な指標を作り出して測定することが困難である。しかしながら、私たちヒトは、他人と共に幸せを分かち合うことが出来る以上、ある一定の指標を作り出し、それを基にして幸福度を客観的に測ることが可能であると考えられる。例えばそれは結婚経験の有無であったり、お酒を嗜むのかといった趣向や、生まれ持って出た性別の差等によって決定しているのかもしれない。

本稿では大竹(2005)・小林(2010)の研究を踏まえ、統計ソフトと実際の大規模全国調査アンケートの結果を利用して、幸せの要素となるものを探り当てることを目的とする。また、どのようなヒトが幸せを勝ち取っているのか、「日本一の幸せ者」はどんな人物像なのかという「幸せの指標」を掴み取り、自らの自己実現に繋げるとともに、近年脚光を浴び始めた「幸福の経済学」という分野の進展にも貢献したい。

上記に挙げた研究目的の下に回帰分析を行った結果、日本で最も幸せを感じるための要素は「結婚・家族・健康・九州・相対的な所得の差」であるとのデータが得られた。

目次

第 1 章	はじめに	4
第 2 章	幸福の経済学	5
第 3 章	分析モデルー順序プロビットモデル	6
第 4 章	データ分析について	
	1 JGSS 概要	7
	2 データの加工	8
	3 説明変数	9
	4 幸福度に関して	10
第 5 章	基本推定結果	
	1 基本属性	11
	2 相対所得仮説の裏づけ	15
第 6 章	おわりに	
参考文献		

第1章 はじめに

本稿では統計ソフト `gretl` と実際の大規模全国調査アンケート JGSS(2000-2003)の結果を利用して、幸せの要素を探り当てることを目的とする。上記に挙げた研究目的の下に回帰分析を行った結果、日本で最も幸せを感じるための要素は「結婚・家族・健康・九州・相対的な所得の差」であるとのデータが得られた。

以下目次の説明

第2章 幸福の経済学

先にも述べたが、近年では幸福と経済学を結びつける分野の進展が目覚しく、人々の幸福度を考える上で、「何が幸福の要因となっているのか」を調べるために、経済学が用いられた先行研究も多々存在する。

大竹(2005)は、阪大の COE が独自に行った大規模アンケート調査の結果を利用して、人々が不幸になる要因を探っている。大竹(2005)の特徴は、とりわけ危険回避度や時間割引率といった「選好パラメータ」と幸福度との相関に重点を置いて分析を行っている点にある。これは、投稿者が行動経済学分野の研究者であることによる。また、小林(2010)では本稿と同様に JGSS のデータを利用して、貧困と幸福度の相関に着眼点を置いて検討している。具体的には、日本国内における都道府県レベルの貧困と人々の幸福度の相関を分析し、更に所得の再分配により貧困度が改善した際の人々の幸福度の変化を検証したものである。

本稿ではこれらの先行研究を元に、これらの結果とも照らし合わせながらデータを検証し、幸せ者の人物像の姿に迫りたい。

第 3 章 分析モデルー順序プロビットモデル

先に統計ツール `gretl` を用いた分析を行う旨を述べたが、ここでは分析で利用するモデルについて述べてゆく。まず、本稿の目的は幸福度と様々な変数の相関を見ることにある。変数同士の相関を見るために、`gretl` では一般線形回帰モデルや多変量線形モデル、制限従属変数モデルといった幅広いモデルの推定に対応しているが、本稿では制限従属変数モデルの中に含まれる、順序プロビットモデルを用いた分析が好ましいと判断した。その理由は、①被説明変数(幸福度)が離散的な値をとっているため、被説明変数が連続的な値をとることを前提とした OLS 推定での推計ができない。②被説明変数(幸福度)が質的変数である、の 2 点が挙げられる。ここで、順序に応じて与えられている数値間での絶対的な差に意味合いがないことには注意をする必要がある。例えば、幸福度の設問において 1 を選んだ人と 5 を選んだ人との間では、幸福度が 5 倍違うのかと言えはそういうわけではない。

第4章 データ分析について

1 JGSS 概要

JGSS とは Japanese General Social Surveys の略語で、日本人の意識や行動を総合的に調査することを目的とした大規模社会調査アンケートのことを示す。以下に JGSS に関する具体的な詳細を記すものとする。

JGSS のデータは調査年度によって質問項目が異なるが、毎年同じ内容を問いかけている設問が大半を占めている。調査対象は満 20～89 歳の男女であり、サンプルの抽出方法は層化 2 段抽出法をとり対象者を決定している。層化は、全国を北海道・東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の 6 ブロックに分け、各ブロック内で市郡の規模に応じて政令指定都市、その他の市、市町村の 3 つに分ける方法をとっている。データの回収方法は、面接法と留置法を組み合わせたものである。回答者の質問項目へのより正確な回答を得るために、複雑な設問は面接法、容易なものやプライバシーが求められる設問は留置法によって回答を集めている。また、毎年同じ内容を問いかける質問には回答者の性別や年齢などといった基本属性が含まれ、そうでない質問に関しては、調査時点において世間で注目されている時事に関する質問が盛り込まれている。例えば、2002 年度の調査項目にあるギャンブル・カジノの設問が他年度に比べ、より詳細に詰問している事の背景には、'02 年当時の東京都石原都知事が「お台場カジノ構想」を発表し、国内カジノ合法化に向けて都庁内でカジノのデモンストレーションを行った、といった社会的背景が存在する。

1972 年より、アメリカのシカゴ大学にある National Opinion Research Center が、総合社会調査として GSS(General Social Surveys)と呼ばれるものを発行し続けているが、JGSS はこれの日本版にあたるものである。日本版である JGSS は 1998 年にプロジェクトがスタートし、調査が始められてから間もないが、その調査項目は就業や世帯構成から死生観、政治意識に至るまで幅広く網羅されている。

なお本研究においては、幸福度に関するデータを集めることを主目的として掲げているため、幸福度に関する回答が最も多く得られた、2000 年、2001 年度の調査データを使用することとする。

2 データの加工

今回のように、アンケート調査の結果と統計ツールを利用してデータを分析する際には、準備段階として「収集データの加工」という行程を踏まなければならない。この行程を終えて初めて、正しいデータ分析を始めることができる点には十分留意すべきである。なお、gretlの最新版においては同作業がJGSSデータを導入した後でも容易である。本稿での具体的な作業内容は(1)欠損値を除外する(2)説明変数の回答項目にダミー変数を割り当てる(3)必要に応じて新しい変数を定義する、の3つである。

(1)に関して、JGSSの設問による回答には「無回答・非該当・答えたくない」など、分析課程に含めると不具合が起ることが予測される様な、所謂「欠損値」というものが存在する。それらの回答項目はgretlで分析前に欠損値として指定し、除外する必要がある。

(2)について、本稿では分析に順序プロビットモデルを利用することを先に述べたが、その為には回答項目にダミー変数を割り当てる行程が必須となる。

最後に(3)だが、本稿の「幸福度」に関する記述の箇所でも述べているが、JGSSでの幸福度に関する変数op5happzは1が幸せ、5に近づくほど不幸である、と定義されている。しかしながら、1が不幸、5が幸せである方が直感的にも分析結果を検討しやすいと思われる。そのため新たな変数OP5HAPPYZを用意し、同変数の定義式を $OP5HAPPYZ = 6 - op5happz$ とすることで幸福度と回答項目の値を反転させた。これにより、分析に使いやすい幸福度の変数を準備することができる。なお、年代ダミー変数に関しては一度全ての年齢に対してダミー変数を割り当てている。そして新たな年代ダミーを作り出し、定義式に回答者が各年代かどうかの判定基準となるものを設定した。

3 説明変数

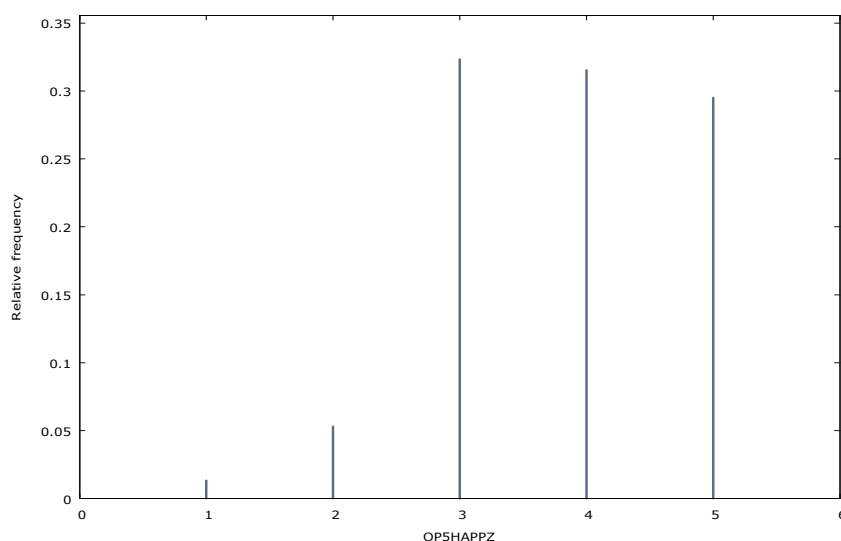
図 4-1

4 幸福度に関して

JGSS の中で幸福度に関しては、留置調査票において設問項目が設定されており、基本属性の位置づけとして毎年回答者に尋ねる項目となっている。回答者は「あなたは、現在しあわせですか。」という問いかけに対し、5段階評価で回答することになる。この設問から、5を選んだ人が不幸で、1を選んだ人が最も幸せ者である、という結果が読み取れる。しかしながら、本研究の分析では不幸な人の姿ではなく、「幸せ者の人物像を探る」ということを目的として掲げている。その為、便宜上変数を調整、1から5に対応する数値を反転させ、1を選んだ人が不幸で5を選んだ人が最も幸せ者である、とした。

なお、2000年度の当設問に対する有効回答数は2893件、2001年度の有効回答数は2790件となり、本分析で用いる両年度の回答を併せた分布を表した結果が、下の図に示されている。これによると、人は「自分が不幸である」というよりも「自分が幸福である」と感じる傾向の方が強いことが分かる。この結果は、大竹(2005)にある大阪大学COEによるアンケート調査結果、「くらしの好みと満足度についてのアンケート」とよく似たものが得られている。なお、同アンケートでの幸福度への有効回答数は4187件であり、本稿で用いるサンプル数と比較しても、同程度のものである。

図 4-2 幸福度と該当者の分布



第5章 基本推定結果

1 基本属性

ここでは大竹(2005)の研究結果を裏付けるべく、JGSS から得られた基本的な属性の説明変数を導入し、幸福度とどのような相関が見られるかを調べた。大竹(2005)との相違点に注意しながら考察する。

図5-1 幸福度と基本属性の相関関係

Model 27: Ordered Probit, using observations 1-5683 (n = 3560)

Missing or incomplete observations dropped: 2123

Dependent variable: OP5HAPPZ

	<i>Coefficient</i>	<i>Std. Error</i>	<i>z</i>	<i>p-value</i>	
DMAN	-0.0554528	0.0452642	-1.2251	0.22054	
DMIKON	-0.804061	0.0955715	-8.4132	<0.00001	***
DSIBETSU	-0.245838	0.0832179	-2.9542	0.00314	***
DHUKENKO_1	0.75025	0.0528175	14.2046	<0.00001	***
DHUKENKO_2	0.310736	0.0499602	6.2197	<0.00001	***
DHUKENKO_4	-0.201766	0.0555683	-3.6310	0.00028	***
DHUKENKO_5	-0.395276	0.0899496	-4.3944	0.00001	***
GEN20	0.23791	0.0959782	2.4788	0.01318	**
GEN30	0.134749	0.0748939	1.7992	0.07199	*
GEN40	-0.118781	0.0684149	-1.7362	0.08253	*
GEN50	-0.101256	0.0622097	-1.6277	0.10360	
GEN70	0.0957112	0.0992361	0.9645	0.33481	
GEN80	0.504707	0.159316	3.1680	0.00154	***
INSOTSU	0.390407	0.217465	1.7953	0.07261	*
DAISOTSU	0.113925	0.0756317	1.5063	0.13199	
TANDAIKOUSENSOT	0.108367	0.0827874	1.3090	0.19054	
KOSOTSU	0.0494506	0.0612752	0.8070	0.41965	
KJINJUSHO	0.107734	0.142754	0.7547	0.45044	
KKOTOSHO	0.265738	0.122601	2.1675	0.03020	**

KCHUGAKUKOTOJO	0.146477	0.126849	1.1547	0.24820	
KJITUGYOSHOGYO	0.715741	0.272128	2.6302	0.00853	***
KSIHAN	0.604921	0.377947	1.6005	0.10948	
KKOKOSENMON	0.122343	0.181003	0.6759	0.49909	
KDAIGAKUANDIN	-0.00177575	0.286515	-0.0062	0.99505	
DDosmoke_1	-0.105317	0.043864	-2.4010	0.01635	**
DSHUKYO_1	0.15643	0.0644543	2.4270	0.01522	**
DSHUKYO_2	-0.0346407	0.0449455	-0.7707	0.44087	
HOKKAIDOTOHOKU	-0.00406503	0.0770774	-0.0527	0.95794	
KANTO	0.00763801	0.0687486	0.1111	0.91154	
CHUBU	-0.0767991	0.0709589	-1.0823	0.27912	
KINKI	-0.0334029	0.0739971	-0.4514	0.65169	
KYUSHU	0.196099	0.0786317	2.4939	0.01264	**
MYHOMEIKKODATE	0.078557	0.0716744	1.0960	0.27307	
MYHOMESHUUGOU	0.0697992	0.0988355	0.7062	0.48005	
CHINTAIKKODATE	-0.0453101	0.121378	-0.3733	0.70893	
SHATAKUIKKODATE	0.319822	0.308342	1.0372	0.29963	
SHATAKUSHUUGOU	0.283919	0.149624	1.8976	0.05776	*
KOUSHAIKKODATE	-1.02555	0.54796	-1.8716	0.06127	*
KOUSHASHUUGOU	-0.013265	0.0997607	-0.1330	0.89422	
JUUKYOSONOTA	0.580386	0.315009	1.8424	0.06541	*
DCITYSIZE_1	-0.020837	0.0630708	-0.3304	0.74112	
DCITYSIZE_2	-0.000327428	0.0476236	-0.0069	0.99451	
NENSHU0	-0.147105	0.367883	-0.3999	0.68925	
NENSHU70	-0.537237	0.162298	-3.3102	0.00093	***
NENSHU100	-0.461118	0.153039	-3.0131	0.00259	***
NENSHU130	-0.1616	0.152888	-1.0570	0.29052	
NENSHU150	-0.579087	0.154949	-3.7373	0.00019	***
NENSHU250	-0.0922364	0.0908909	-1.0148	0.31020	
NENSHU350	-0.0316969	0.0758391	-0.4179	0.67598	

NENSHU550	0.0089609	0.0783242	0.1144	0.90891	
NENSHU650	-0.0363655	0.0827221	-0.4396	0.66022	
NENSHU750	0.0356215	0.0858802	0.4148	0.67830	
NENSHU850	0.107635	0.0831354	1.2947	0.19542	
NENSHU1000	0.151466	0.0803867	1.8842	0.05954	*
NENSHU1200	0.233758	0.0844921	2.7666	0.00566	***
NENSHU1400	0.335392	0.10628	3.1557	0.00160	***
NENSHU1600	0.415886	0.137251	3.0301	0.00244	***
NENSHU1850	0.262607	0.161687	1.6242	0.10434	
NENSHU2300	0.415214	0.187949	2.2092	0.02716	**
DDOFINDJOB	-0.185081	0.0971231	-1.9056	0.05670	*
DTENSHOKU0	0.0226277	0.0673532	0.3360	0.73690	
DCHILDNUM_0	0.113099	0.0728055	1.5534	0.12032	
DSETAISU0001_1	-0.101396	0.0814296	-1.2452	0.21306	
DFq4lotto_4	0.0700979	0.040384	1.7358	0.08260	*
DFq4pachi_4	0.0106658	0.0457788	0.2330	0.81577	
DOSAKE_7_GEKO	0.0469975	0.0476067	0.9872	0.32354	
cut1	-2.27434	0.150508	-15.1111	<0.00001	***
cut2	-1.46449	0.139594	-10.4911	<0.00001	***
cut3	-0.0894809	0.136907	-0.6536	0.51338	
cut4	0.870741	0.137467	6.3342	<0.00001	***

Mean dependent var	3.875843	S.D. dependent var	0.941850
Log-likelihood	-4225.155	Akaike criterion	8590.310
Schwarz criterion	9022.736	Hannan-Quinn	8744.504

Number of cases 'correctly predicted' = 1549 (43.5%)

Likelihood ratio test: Chi-square(66) = 7

考察

下の表は大竹(2005)と本稿との相違を表している。○は幸福度に優位な影響を与えているもの、×は特に相関関係がみられなかったものを示す。

図 5-2 分析結果の相違

	本稿	大竹(2005)
性差	×	×
婚姻の有無	○	○
死別の有無	○	○
健康度	○	○
年齢	○	○
最終学歴	×	○
喫煙の有無	○	○
宗教の有無	○	○
居住地方	○	○
居住形態	○	○
市郡規模	×	○
世帯年収	○	○
求職中か否か	○	○
子供の有無	×	×
独り身か否か	×	×
ギャンブル	×	×
飲酒頻度	×	×

男性は平均的に女性よりも不幸であるが、様々な変数を調整した結果、最早有意に不幸ではなくなった。未婚者は既婚者と比べ、優位に不幸である。死別を経験した人は優位に不幸である。健康的な人ほど優位に幸福、不健康になるほど不幸との結果が示された。

2 相対所得仮説の裏付け

大竹(2005)によると幸福度は絶対的な所得よりも相対的な所得により決定しているとのデータが示されている。ここではその研究を踏まえ、説明変数に前項の基本属性に加えて、相対的な所得の違いを聞いた変数を入れてみた。なお、紙幅を節約する為、下の図では前章と大きな違いが認められたもののみを掲載している。

GEN20	0.209048	0.0971729	2.1513	0.03145	**
GEN30	0.132102	0.0759707	1.7389	0.08206	*
GEN40	-0.098615	0.0692408	-1.4242	0.15438	
GEN50	-0.0555024	0.0630626	-0.8801	0.37880	
GEN70	0.0798133	0.101878	0.7834	0.43338	
GEN80	0.492327	0.162942	3.0215	0.00252	***
NENSHU0	0.182442	0.371617	0.4909	0.62347	
NENSHU70	-0.311586	0.16671	-1.8690	0.06162	*
NENSHU100	-0.245901	0.156431	-1.5719	0.11596	
NENSHU130	0.0697744	0.158209	0.4410	0.65919	
NENSHU150	-0.420032	0.158847	-2.6443	0.00819	***
NENSHU250	0.0690592	0.0929616	0.7429	0.45756	
NENSHU350	0.0465593	0.0772641	0.6026	0.54678	
NENSHU550	0.0100431	0.079308	0.1266	0.89923	
NENSHU650	-0.0798473	0.0842493	-0.9478	0.34326	
NENSHU750	-0.0371832	0.087049	-0.4272	0.66927	
NENSHU850	0.0350985	0.0846272	0.4147	0.67833	
NENSHU1000	0.0144373	0.0825898	0.1748	0.86123	
NENSHU1200	0.0716592	0.0873166	0.8207	0.41183	
NENSHU1400	0.176681	0.110311	1.6017	0.10923	
NENSHU1600	0.217865	0.140715	1.5483	0.12156	
NENSHU1850	0.0123636	0.166507	0.0743	0.94081	
NENSHU2300	0.15926	0.19135	0.8323	0.40524	

DSETAISU0001_1	-0.159134	0.0822929	-1.9338	0.05314	*
DDOFINDJOB	-0.158979	0.0980677	-1.6211	0.10499	
DOp5ffinx_1	-0.648332	0.0727116	-8.9165	<0.00001	***
DOp5ffinx_2	-0.235336	0.0453434	-5.1901	<0.00001	***
DOp5ffinx_4	0.195165	0.0682657	2.8589	0.00425	***
DOp5ffinx_5	0.52562	0.206974	2.5395	0.01110	**
DOpffix15_1	0.069692	0.0654647	1.0646	0.28707	
DOpffix15_2	-0.00730974	0.0459542	-0.1591	0.87362	
DOpffix15_4	0.0959871	0.0589035	1.6296	0.10319	
DOpffix15_5	0.204338	0.139099	1.4690	0.14183	

第 6 章 おわりに

参考文献

謝辞